

『マナーチャイルド』

鈴木剛介

2019/6/02...

★ご安心頂くために。「作家・鈴木剛介」の新作小説、無限の生を設定することによって、死生観を反転させたエンタテイメント『火の鳥 0528』の金版（マナー・バージョン）です。お手数ですが、デジタルなコミュニケーション・ツールを喪失しておりますため、お葉書で一言、ご感想を頂けると、とても嬉しいです。久しぶりに「まともな」文章を書いたもので（笑）

高広（たかひろ）は、貧乏になりたかった。高広は金持ちだった。高広には、1京（けい）の資産があった。

高広は都心の高層マンションの39階に、母方の祖母と共に暮らしていた。記憶にある限り、ずっと。両親のことは、何も知らなかった。祖母も何も教えてくれなかった。誰も何も教えてくれなかった。ただ、祖母はとても優しくかった。

高広は、公立小学校の5年生。普通の上履きを履き、普通の給食を食べる。友だちも、近所の普通の家庭の子ともだ。自分と祖母が住むマンションも、120平米の3LDKではあるが、ものすごく頑張ったサラリーマンが買えない額ではない。単に資産がある。それだけのことだった。途方もない資産が。

高広は、小学生にしては整った大人びた顔立ちをしており、身長はクラスで後ろから三番目。細身。というよりは「スマート」。私服は祖母の見立てで、品もセンスも良く、ママさんたちから絶大な人気があった。成績は学年トップ。ミニバスに所属しており、「将来の夢は、カイリー・アービングみたいな選手になること」と冗談を言っても、場が白けないだけの実力を持っていた。高広のクラスでは、男子と女子の交流があまりない。だから、自分が女子からどう見られているのかは知らない。でも、好きな女の子はいた。同じクラスの国分桃代さん。学内では目立って可愛い子で、クラスの男子の大半は、高広と同じ思いを抱いていた。高広が他の男子と違ったのは、唯一、国分さんに告白して振られた経験がある人間だということ。三日前、高広は、国分さんへの慕情が抑えきれなくなり、屋上校庭の片隅に無理やり彼女を連れて行って、言った。

「1億円払うから、僕と付き合ってください」
と。

「本気で言っているの？」

国分さんは、眼を大きく開いて黙り込んだ後に、小さな声で言った。

「本気です。1億円でダメなら、2億円出します。僕と付き合ってください」

と、高広は、この上もなく真剣な顔で言った。

「タカヒロくん、頭、狂ってる」

国分さんは、少し脅（おび）えたような目つきで高広を睨むと、逃げるようにその場を去った。高広は後に知ることになる。小学生の気持ちは「まだ」金で買えない、ということ。告白したら、気が済んでしまい、国分さんへの恋心は、それであっさりと醒めてしまった。

* 2 *

高広の資産は、祖母の名義で東京三菱UFJ銀行に一括して「1京円」として、預金してあった。高広は祖母名義のキャッシュカードと自分しか知らない暗証番号で、ATMから自由に金を引き出すことが出来た。事実上、無限に等しい金を。

高広は、母親がまだ10代の時に産んだ子で、血縁の父親は70代の高齢。そして、その父親の曾祖父（そうそふ）は、世間の表舞台にはあまり名の出ることのない、世界最大閨閥（けいばつ）の、もつともオリジンとなる人物の直系だった。顔も名前も知らない高広の父親は、ややこしい相続の手続きを、あらゆる金融手段を駆使して、処理し、自分が継いだ金のすべてを、ただ一人の実子である息子が自由に使える状態にセットアップした直後に、心臓発作で死亡した。母親は、高広を出産した直後に自殺していた。だから、育ての親である祖母は、高広には、何も語らなかつた。高広には、自由に使えるお金がとてもなくさんある、ということ。そして、そのお金を高広に与えてくれた人は「お金から学ぶことが、一つでもあればいい」と言い残したこと以外には。そして、高広は小学5年生にして、既に金について多くのことを学んでいた。

「金で買えないものはない」

という言葉を、時折、目にしたり耳にしたりした。大人なのに、アホ過ぎる。と高広は思う。お金をたくさん払う、と言ったのに、国分さんは、僕とは付き合ってくれなかつた。持つて生まれたポテンシャルだけで、フリースローとレイアップの9割は入るし、ドリブルで三人抜いたこともあるけれど、カイリー・アービングのスキルは、どれだけの大金を積んでも手には入らない。運動して汗をたくさん流した後は、とてもスッキリした気分で気持ちがいいけれども、そのスッキリとした爽快感も、お金では買えない。いくら、お金を払っても、自分で努力して勉強しなければ、知識は自分の頭の中に入って来ない。問題は、高広が、その努力の意味を見失いつつあることだった。

人間は、なぜ「努力」するのだろう？ と、高広は考える。生きて行くため？ 僕は生きて行くために努力する必要がない。なりたいたいものになるため？ 僕には、なりたいたいもの

も、したいことも、欲しいものもない。「バスケが楽しい」と思えなくなりつつあることに、高広は恐怖を覚えつつあった。僕は「何もしない人」になつてしまふのではないのだろうか？

この先、高校生、大学生、そして大人になれば、好きな女の人が出来た時、たぶん、お金をたくさん払えば、その女の人と付き合うことは出来るのだろうかと思う。でも、そうして付き合った女の人と一緒にいても、楽しいとは思えないだろう。その女の方は、僕にお金がなくなれば、僕と付き合うことを止める。だったら、その女の方は、僕を好きになつたわけではなく、僕の持っているお金を好きになつただけだ。そんな女の人を、やっぱり、僕は好きになれない。僕のことを好きだ、と言つてくれる女の方が、この先現れたとしても、本当に僕のことを好きなのか、僕の持っているお金が好きなのか、どうやって見分ければいいのか？ そんなことを考えていると、高広には、むしろ、貧乏な人が羨ましく思えて来た。少なくとも、貧乏な男の方は、自分を好きだ、と言つてくれる女の人のことで、そんな悩みを持たずに済む。もし、僕がものすごく貧乏だったら、自動販売機で買った130円のジュースが、どれほど美味しく感じられるだろう。特Aランクの黒毛和牛や世界中の美味珍味の味にうんざりと飽きてしまうこともないだろう。お金がなければ、どれだけ幸せだろう？ お金がなければ、どんな楽しいことがあるのだろうか？

小学5年生の夏休みの宿題で出た「将来の夢」という作文で、高広は「貧乏になること」というタイトルで文章を書いた。書いた作文を、提出する前に、祖母に読んでもらった。「いいんじゃない」と、祖母は言った。

「おばあちゃんの貯金はゼロ。お金はすべて、あなたのお金。自由に使えばいい。でも、最終的な使い道を決めるのは、二十歳になつてからにしない」と。

3

私立に進んだ中学2年生の時、100万円払ったら、学校で一番可愛い先輩が付き合ってくれたが、三日で別れた。もちろん、お金を返して欲しいとは思わなかった。中学の時の成績は中の中だったが、おばあちゃんが電話してくれて、都内で偏差値がトップの高校に進学出来た。特に、その学校が好きだったわけではない。どこでも選べるなら、そこでもいい、というだけの話だった。生徒は全員、血眼で東大進学を目指していた。僕は、ハーヴァードだろうが、ケンブリッジだろうが、どこでも行きたい大学に行ける。でも、行つてどうする？ と、また考える。相変わらず、欲しい物も、したいことも、なりたいたいものもない。なくても、別に生きて行くためには困らない。困らないけど、楽しいこともない。どれだけ使っても使っても、お金はなくならない。使い道がない。お金の減らしようがない。生きて行くには困らないけど、楽しくない人生。だったら、生きて行くのは大変だけ

ど、楽しい人生の方が、100万倍いいに決まっている。
そして、高広は、二十歳になる誕生日の前日に決心を固めた。

*** オチは決まっているのですが、短編です。説教くさい、という突っ込みはなしでお願いします(笑) 承知してはいるのですが、現在の脳みそで、自然とこういう作品が生まれてしまったもので。

このオチが、名詞
ハートメーカー財団の
「お金が余っている方へ」
…というメッセージに
直結します。
作業とは関係ありません。
読んでほしかっただけです。

鈴木.